

1. 保存についての判断基準

1. 歴史的建造物としての評価

(1) 日本近代建築史上の位置付け

・旧検見川無線送信所は通信省営繕課の吉田鉄郎（東京中央郵便局の設計者）による初期の作品。

通信省営繕課には優秀な建築家が多く集まり、「通信建築」といわれる秀逸な公共建築を築いてきたが、吉田鉄郎は山田守らと共にその黄金期を築いた建築家である。

旧検見川無線送信所

・旧検見川無線送信所は初期モダニズムの作例であり、日本近代建築が画一的な合理主義やインターナショナルスタイルへ収斂していく前の、過渡的な時代の作品である。日本近代建築の変遷を知るうえで重要な位置を占める。

旧検見川無線送信所

意匠的特質

・明治から大正初期の様式建築とは明らかに異なっており、オーダーや彫刻などの様式的表現が排除されている。またアール・ヌーボーやユーゲント・シュティルなどの世紀末的装飾スタイルからも脱している。総じて無装飾を基調とした意匠であり、後の合理主義的な近代建築の萌芽が、すでに色濃く表れている。

旧検見川無線送信所

・隅丸、パラボラアーチ^{＊注1}、庇の曲線など、要所の細部意匠は表現主義的傾向を有し、初期モダニズムの多様性を示している。通信省の同僚・山田守（東京中央電信局の設計者、分離派建築会^{＊注2}メンバー）の作風に通じるものがあり、分離派建築会の影響も感じられる。

旧検見川無線送信所

・全体は、平面的にも立面的にも左右対称である。また開口部（窓・出入口）の配列など、小単位ごとにも左右対称の意識が浸透している。

意匠的にはモダニズム的でありながら、左右対称という古典的な手法を採用することによって建物が安定して見え、記念建築のような重厚感も獲得している。

なお小単位ごとの左右対称という手法は、後の東京中央郵便局に受け継がれている。

[[]*注1] パラボラアーチ：放物線状のアーチ。山田守の作品に頻出する。旧検見川無線送信所では、当初のアーチはすべてパラボラアーチであり、ホール・倉庫廻りの真円アーチは後補。

[[]*注2] 分離派建築会：帝大卒業生らによって大正9（1920）年に結成された日本最初の近代建築運動。「過去建築圏より分離」を謳い、建築の芸術性を主張した。初期メンバーは石本喜久治、滝沢真弓、堀口捨己、森田慶一、山田守、矢田茂。

・開口部は1連・2連・3連、および2層吹抜の窓が使い分けられており、間取りや用途の点から機能的でありながらも、審美的に吟味されてリズムカルに配置されている。

無装飾な外観を、窓の比例感で演出するという手法は、後の吉田鉄郎作品に通底する重要な要素である。但し、後の作品では引き締まった禁欲的な緊張感が漂うが、ここでは初期の若々しい自由な気風も感じられる。

旧検見川無線送信所

材料・工法

・大正期の鉄筋コンクリート造であり、日本近代建築史上、初期の鉄筋コンクリート造^{＊注3}に属す。関東大震災の後、それまでの木造・レンガ造から、堅牢な鉄筋コンクリート造へと、にわかに変遷していく過程を示している。

旧検見川無線送信所

(2) 吉田鉄郎作品としての位置付け

・吉田鉄郎の作品は、初期（大正～昭和初年）には表現主義的な作風であったが、中期以降（昭和初年～）は合理主義的な作風に変化していく。

旧検見川無線送信所の意匠は、その両者（表現主義と合理主義）が混在したかたちで表出されている。吉田鉄郎個人の作歴のなかでも過渡的な変節点に位置しており、吉田鉄郎の作風変遷を知るうえで重要である。

前述のように、無装飾建築における審美的な窓配置、小単位ごとの左右対称など、後の作風に繋がる要素もみられる。

旧検見川無線送信所

(3) 東京無線電信局の遺構

・通信省東京無線電信局による送受信は、東京中央電信局、検見川送信所、岩槻受信所が連携し、東京中央電信局からの中央集中方式（遠隔操作）で行われていた。

旧検見川無線送信所

東京中央電信局　山田守設計　大正14（1925）年竣工
検見川送信所　吉田鉄郎設計　大正15（1926）年竣工
岩槻受信所　山田守設計　大正13（1924）年竣工

旧検見川無線送信所

・山田守設計による東京中央電信局と岩槻受信所は、いずれも表現主義的作風である。検見川送信所にみられる表現主義的な意匠は、これらに影響を受けたのではないかともいわれている^{＊注4}。

なお通信省以外のもの、また諸外国のものも含め、当時の無線局や電話局の建物は表現主義的傾向が強い（依佐美送信所（愛知・昭和4（1929）年・現存せず）、ラジオ・コート

[[]*注3] 日本最古の鉄筋コンクリート造建築は明治44（1911）年の三井物産横浜支店（遠藤菟設計、現存）。

[[]*注4] 『建築家吉田鉄郎とその周辺』（向井覚・相模書房・昭和56（1981）年）。

ワイク（オランダ・大正11（1922）年）等）。

・東京中央電信局、岩槻受信所は現存せず、当時の東京無線電信局の遺構としては、旧検見川無線送信所のみが残されている。

旧検見川無線送信所

2. 通信施設としての歴史的意義

旧検見川無線送信所

・日本における無線通信の初期の舞台であり、この場所で数多くの実績を成し遂げており、「日本初」を冠するものも多い。

旧検見川無線送信所

- 昭和2（1927）年、日本初の標準電波発射。
- 昭和4（1929）年、独・飛行船ツェッペリン号と交信。
- 昭和5（1930）年、日本初の対航空機無線通信。
- 昭和5（1930）年、日本初の国際放送（浜口雄幸首相のロンドン軍縮条約締結記念放送）。
- 昭和6（1931）年、無線電送写真実験（ファクシミリ）。
- 昭和7（1932）年、ロサンゼルスオリンピック中継放送。
- 昭和15（1940）年、標準電波発射業務を正式に開始。米国に継ぎ世界で2番目の短波JJY（標準電波局）となる。

旧検見川無線送信所

・当初に導入された主要な送信機は、世界初の無線電信会社であるマルコーニ社製の真空管式長波送信機であった。またすでに国産真空管式送信機も装備されていた。

旧検見川無線送信所

3. 結　語

旧検見川無線送信所

旧検見川無線送信所は、吉田鉄郎の初期の作品として、また初期モダニズムのあり方を示すものとして、日本近代建築史上、貴重な遺構であり、文化財的価値を有する。

さらには日本の無線通信史上、数多くの業績を有しており、場所自体（建物・敷地）が、初期の無線通信における史跡や近代化遺産ともいえる歴史的・文化的価値を有する。

初期モダニズムの類例は年々減少していく傾向にあり、特に同時代の無線局局舎の現存遺構は、旧検見川無線送信所を除いて皆無に等しいことから、建物の保存が望まれる。

2. 建物の現況

1. 耐震安全性

旧検見川無線送信所

先行する耐震診断によって、1・2階共に耐震指標値が判定指標値を上回っており、耐震性能に問題はないことが確認されている。壁が厚いことが主たる要因である。また一部の極脆性柱^{ごくぜい}に対し、構造スリット等による耐震補強を施せば、さらに耐震性能を改善できる。

旧検見川無線送信所

旧検見川無線送信所

旧検見川無線送信所

旧検見川無線送信所

旧検見川無線送信所

昭和54（1979）年の業務終了後、建物の破損が進行し、35年を経た現在では、廃墟とも見える状態となっている。

旧検見川無線送信所

・屋　上

屋上には30cm角のコンクリート平板が敷き詰められているが、その目地に根を張り、草木が繁茂している。一部には太い幹を有する樹木に成長しているものもあり、植物の根が屋上スラブのコンクリート亀裂に入り込み、亀裂を広げながら成長している恐れがある。事実、2階の天井には漏水の跡が散見され、太い樹木の直下には激しい漏水が生じている。

このまま放置すれば、樹木の生長に伴って屋上スラブの破損が進み、雨漏りがさらに激しくなるものと予想される。主要構造部の劣化を招いており、早期の対策が必要である。

旧検見川無線送信所

・外　壁

正面上部の外壁は破損が激しく、コンクリートの表面が崩壊して鉄筋が露出している。

直接の原因は、近接する樹木の枝が、強風で外壁を擦りつけていたためと考えられる。これによりモルタルが剥がれ、コンクリートの亀裂から雨水が浸入し、鉄筋が錆びて爆裂し、コンクリート表面が崩壊したのであろう。

なお現在は樹木の枝払いが行われており、枝は建物に接していない。しかし、このまま放置すれば、すでに破損した外壁から雨水がコンクリートに浸透し、さらなる鉄筋の爆裂、外壁崩壊を招く恐れがあり、早期に補修が必要である。

旧検見川無線送信所

[[]*注6] 極脆性柱：腰壁・垂壁を有し、変形性能が低い柱。構造スリット、炭素繊維巻き等で耐震補強が可能である。

・**建具**
 外壁の開口部は、不審者の侵入を防止するため、すべて鉄板で塞がれている。このため外光が得られず、内部は昼でも真っ暗である。また外観の美観を著しく損ねており、廃墟の雰囲気を助長している。
 鉄板の内側（あるいは外側）に残存する木製建具は、総じて破損が甚大であり、ガラスが割れ、棧が欠け、開閉できないものがほとんどで、建具として機能していない。内部の建具も概ね同様の状態である。

・**内装**
 内部は建物として使用できない程に破損、汚損が進行している。
 壁・天井は漆喰仕上であるが、表面に後世のペンキが塗られている。そのペンキがほぼ全域で剥落し、めくれ上がっており、甚だしく美観を損ねている。また侵入者による落書きが各所にみられる。
 床には割れたガラス、壊れた建具、剥落したペンキと漆喰片などが散逸し、また大量のゴミや塵が集積している。中古のPタイルには割れ、めくれが目立つ。
 奥のホールでは、2階の木造床（中古）が腐朽して一部崩落しており、危険な状態である。

3. 立地

1. 位置

旧検見川無線送信所は千葉市花見川区検見川町5丁目2069番地に所在する。JR新検見川駅より南西へ0.7km程の地点に位置し、周囲1～2kmの範囲に京成電鉄検見川駅・京成稲毛駅、JR検見川浜駅の3駅が取り巻いており、交通は比較的利便である。

新検見川駅からは徒歩圏内にあり、比較的交通量の多い大通りを経て、新興住宅地の中を進み、敷地へ至る。

2. 敷地

当初の検見川無線送信所は約6.6haの広大な敷地を有していたが、現在は区画整理が進み、かつて中学校建設用地として確保された旧敷地の一部（約2.3ha）が市有地となって残されている。敷地内には送信所の遺構の他に建物はなく、建ち並んでいた鉄塔もすべて撤去され、一面の野原となっている。

隣接する街区も旧送信所敷地の一部であり、送信所時代に設けられたグラウンド（野球場）が整備され、市営のスポーツ施設として使用されている。また北東隅には検見川稲毛土地

区画整理事務所がある。

現敷地周囲は区画整理によって宅地として分譲され、比較的新しい住宅が建ち並ぶ閑静な住宅街となっている。また現敷地の北側には、遊歩道が整備されている。

建物規模に比して敷地は十分に広く、障害物もないため、建物保存には適した環境を有している。また敷地境界線（道路境界線）と建物の間は最短でも10数m離れており、法規上の「延焼の恐れのある部分」は発生しない。

3. 復原考察と改修履歴
1. 当初形式
<div> <ul style="list-style-type: none">大正15（1926）年創建当初の間取りは、『検見川無線史』、『東京無線電信局設備大要』等に記載された間取り図、および建物痕跡によって知られる。 建物規模とT字型の平面形状は当初も現在と同じであり、当初は正面側の南棟が主として管理・事務室、背面側の北棟が機械室（通信・電気）であった。 主玄関は正面階段を上がった2階であり、階段ホール周囲に局長室、応接室、事務室があった。1階正面出入口は通用口であり、階段ホール周囲は工夫溜（作業員控室）、小使室（用務員室）、倉庫等であった。 北棟中央部は、現在は木造床が張られ2階建てになっているが、当初は北側半分を2層吹抜とした機械室（発電機室）であった。 </div>
2. 改修履歴
<div> <ul style="list-style-type: none">昭和8（1933）年に新棟（第3発振室、現存せず）が完成し、渡廊下で北棟西側と繋がれ、接続部出入口が改修された。 昭和12（1937）年に新棟（第4発振室、現存せず）が完成し、2階建ての渡廊下で北棟北側と繋がれた。このため北棟中央の機械室吹抜に木造床を張り、総2階建てに改修された。また接続部出入口も改修された。なお現在の木造床はその後に更新されている。 同じく昭和12（1937）年に新棟（エンジン室、現存せず）が完成し、渡廊下で北棟東側と繋がれ、接続部出入口が改修された。 </div>

*注7 千葉市都市局都市部市街地整備課検見川稲毛土地区画整理事務所。

*注8 『検見川無線史』 検見川無線史編集委員会・昭和54（1979）年。

*注9 『東京無線電信局設備大要』 逋信省・大正15（1926）年。

・業務の変遷に伴い、各所で間仕切の変更（増設・撤去）が行われた。現在は比較的小さな部屋に細分化されているが、多くは後世に木造間仕切を付加して分割したものである。また一部では当初の間仕切を撤去して大部屋に改変した部分もみられる。
 ・当初の北棟は機械室であったが、次第に新棟へ通信機器が移設されたため、北棟は休憩室や労働組合員室等に転用されていった。

4. 修理方針の策定
1. 概説
<div> <ul style="list-style-type: none">旧検見川無線送信所は破損の進行が激しく、特に主要構造部の破損（屋上スラブ・外壁）については、一刻も早い修理が望まれる。しかし建物用途と管理運営形態の選定、予算の調整、都市計画の見直しなど、利活用にあたって検討に時間がかかると思われる課題が山積している。 このため、修理・整備計画は2段階方式とし、第1期で建物維持保存のための緊急修理を先行して実施し、第2期で本格的利活用を目指した整備・改修を行うのが望ましいと思われる。 また第1期工事完了後は建物を放置せず、試験的な用途で利活用を開始し、その状況を勘案して第2期の方針を検討するべきと思われる。 </div>

2. 第1期 緊急修理

主要構造部の破損箇所、および脆弱箇所を修理し、今後の建物破損の進行を抑止し、維持保存可能な状態に回復する。また内外装、建具等を修理し、建物を最低限使用可能な状態に回復する。

・屋上スラブ修理

平板を剥がし、屋上の草木を撤去し、屋上スラブのコンクリート破損箇所を修理する（一部斫り、無収縮モルタル補修、セメントスラリー注入等）。また防水層を新規整備する。

・外壁破損箇所修理

外壁コンクリート崩落箇所の修理を行う。爆裂・断面欠損した鉄筋は切断のうえ交換し、吹き付けコンクリート打設あるいは無収縮モルタル補修を行う。

・コンクリート亀裂補修、中性化防止

もろくなった洗い出しモルタルを一旦剥がし、コンクリートの亀裂にエポキシ樹脂またはセメントスラリー等を注入して補修する。
 また外壁コンクリートの中性化が進行しているため、浸透性アルカリ性付与材または浸透性防錆材を塗布する。
 その後、洗い出しモルタル塗りを復旧する。

・建具修理

開口部の鉄板を撤去し、木製建具を修復する。改変箇所はできるだけ当初形式に復原する。
 またアルミ等のサッシに整備する方針も考えられる（但し框が太くなる等、意匠が若干変化する）。
 なお法規上、延焼のおそれのある部分が存在しないため、外壁の開口部が木製であっても、耐火建築物とみなされる。

・内装修理

壁・天井の漆喰を塗り直す。
 床の中古Pタイルを撤去し、当初を想定してモルタル金ゴテ仕上げ、リノリウム敷き等とする。

・間取りの復原

木造間仕切による改変箇所は、原則として当初の間取りに復原する。但しコンクリート壁の改変箇所は、現状踏襲する。

・設備整備

電気（照明・コンセント・防災）、空調、給排水衛生等の設備を最低限整備する。

・外構整備

建物周辺および敷地内アプローチの整地、および最低限の整備を行う。

3. 第2期 整備・改修

永続的な利活用として選定された建物用途（次項参照）に即し、必要に応じて内装や造作を一部改修する。また外構についても選定された建物用途に即した整備を行う。

（例）

- 仕上材（床・壁）、間仕切、柵等の付加
- テナント改修
- 家具、サイン等の整備
- 設備機器（照明・空調・音響・給排水等）の付加
- 外構（植栽・フェンス・舗装・その他施設）

5. 整備方針の策定

1. 保存・活用の事例

(1) 吉田鉄郎の初期の現存作品

・山田郵便局電話分室

大正12(1923)年、煉瓦造平屋建、三重県
電話交換室の移転に伴い、昭和30(1955)年より伊勢健康管理所、伊勢通信診療所として利用されていたが、平成9年(1997)よりフランス料理店「ボン・ビビアン」として営業している。伊勢神宮外宮前の好立地に位置している。

・京都中央電話局新上分局

大正13(1924)年、RC造4階建、京都府
京都市登録文化財。平成元(1989)年より1階でチャペル付きレストラン「カーニバルタイムズ」が営業を始め、シーフード料理で知られる人気店となった。その後、営業譲渡され、平成17(2005)年にレストランを閉店して結婚式場のみとなり、平成21(2009)年には結婚式場も閉店した。
平成22(2010)年からは、スーパーマーケット「フレスコ」が1階で営業している。

また2・3階は「コナミスポーツクラブ京都丸太町」として使用され、エクササイズスタジオ、マシンジムのほか、屋内プール(15m)も造られている。

・京都中央電話局

I期大正15(1926)年、II期昭和6(1931)年 RC造4階地下1階、京都府
京都市登録文化財第1号。電話交換所の後、京都電電ビル西館として使用されていたが、平成13(2001)年より商業施設「新風館」としてリニューアルオープンした。リニューアル設計はNTTファシリティーズとリチャード ロジャースパートナーシップ ジャパン。平成14(2002)年度BELCA賞(ベストリフォーム部門)、平成16(2004)年度グッドデザイン賞(建築・環境デザイン部門)受賞。

(2) 逓信省による同時代の現存作品

・京都中央電話局西陣分局 設計・岩元祿

大正10(1921)年、RC造3階建、京都府
国指定重要文化財。現在はNTT西日本西陣別館となり、その一部をベンチャー企業のための事業支援施設「西陣IT路地」として活用している。運営は特定非営利活動法人京都西陣町家スタジオで、京都府、NTT西日本と連携している。

・下関電信局電話課 設計・山田守

大正13(1924)年、RC造3階建、山口県
下関市有形文化財。現在は「下関市立近代先人顕彰館(田中絹代ぶんか館)」として、下関市にゆかりのある近代以降の文学者とその作品、下関市が所有する田中絹代の調度品や衣服などの遺品、出演作の台本、ポスター、スチール写真などの映画資料を展示している。田中絹代記念室のみ有料。

(3) その他

・依佐美送信所記念館

昭和4(1929)年に開業した依佐美送信所(愛知県刈谷市)を平成18(2006)年に解体し、その敷地に市営施設「フローラルガーデンよさみ」をオープンした。送信所跡地には旧建物を模した依佐美送信所記念館を建設し、送信機器類の展示を行っている。

2. 文化的活用方針と文化財としての可能な整備の調整

(1) 建物用途の選定

前項でみたように、同時代、同傾向の近代建築は、複合商業施設、レストラン、結婚式場、博物館、スポーツクラブ、スーパーマーケット、ベンチャー企業支援施設等、多岐にわたる用途に利活用されている。

このことからわかるように、近代建築の再生・利活用にあたっては、用途の選定に定型的な方式はなく、個々の与条件によって検討すべきものと思われる。

旧検見川無線送信所の利活用においても、定型的な方式はないものと思われるが、可能性として以下のような用途が想定される。

- ・博物館(近代建築関連、通信関連、郷土関連等)
- ・ギャラリー・画廊・展示施設
- ・集会施設(講演会・教養講座・体験実習)
- ・貸し室(イベント・サークル活動)
- ・店舗、飲食店(テナント方式)
- ・上記の複合

しかし建物用途の選定は、関係各方面の意見調整、および具体的な事業者や収支の見込み等を慎重に検討する必要がある、直ちに決定できるものではない。このため前述のように、まず第1期工事を行って建物の破損を修理し、維持保存可能な状態に回復したうえで、ある程度の時間をかけて検討を行う必要がある。

(2) 建物用途選定における問題点

・用途地域

現在の敷地は、都市計画上の用途地域が第一種低層住居専用地域となっている。このため法規制により、現状のままでは店舗、事務所、展示・集会施設等は建てられない(小規模集会所は可能)。

・周辺地域環境との調和

敷地の周囲も第一種低層住居専用地域であり、閑静な住宅地が広がっている。このため、周辺地域環境との調和を図り、大音響が発生する用途、群衆が一時に大挙して訪れるような用途は避けるべきと考えられる。

(3) 文化財としての修理・改修

歴史的価値保存のため、改修にあたっては、旧状に復旧可能(取り外し可能)な仕様が望ましい。

なお前記1-(1)の現存遺構は、いずれも文化財の指定を受けている。極度の改修を抑制する意味でも、文化財の指定は必要と思われる。

(4) 部屋の大きさによる使い分け

現在は比較的小さな部屋が多いが、間取りの復原によって、一部に大空間を確保可能となる。利活用にあたっては、ホール(集会場)、事務所、店舗などの用途によって、大部屋と小部屋を効果的に使い分ける工夫が必要と思われる。

6 管理運営方法

(1) 管理運営主体

管理運営主体は、継続性と健全性の面から検討が必要である。

考えられる管理運営主体としては、市(生涯学習振興課、文化振興課、集客観光課、公園管理課等)、観光協会、民間委託、地域住民との協働等を挙げることができる。

(2) 利用者

施設利用者は、一般観光客の他、市民、小中学校等(課外授業)、団体、マスコミ・映像撮影誘致(フィルムコミッション)等を挙げることができる。

(3) 集客と演出

活用内容の持続性と安全性を図るため、どのような用途となったとしても、リピーターを確保できる演出が必要と思わ

れる。そのためには以下のような視点が考えられる。

・地域に密着した活動を盛り込み、地域住民が繰り返し訪れるような施設とする(地域活性化)。

・建物内外において、定期・不定期にイベント(講演会・教養講座、展覧会・サロン、体験・実習、サークル活動等)を検討する(賑わいの創出)。但しコンサートは近隣との関係に考慮が必要である。

(4) 有料・無料

運営経費の縮減のため、また文化遺産としての貴重さの周知のため、有料化の検討も必要と思われる。

また一方で、地域住民や小中学生等に対し、無料で活動できる場を用意することも必要と思われる。

■建物概要

名称 旧検見川無線送信所
 (当初は逓信省東京無線電信局検見川送信所)
 所在地 千葉県花見川区検見川町 5-2069

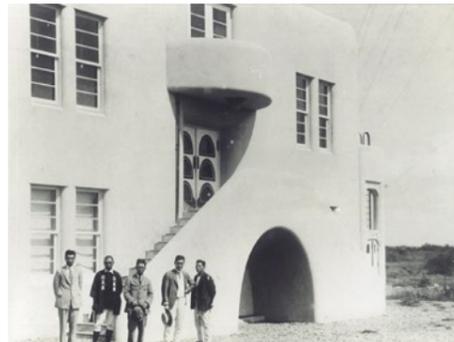
構造 鉄筋コンクリート造 2階建て
 面積 建坪 687.47㎡ (正面階段含まず)
 延べ床 1,374.93㎡ (塔屋含まず)
 (当初は 1,295.61㎡)

設計 逓信省経理局営繕課
 設計 吉田鉄郎
 製図 橋本真太郎
 監督 新作義信・南田喜義・菅原勝四郎

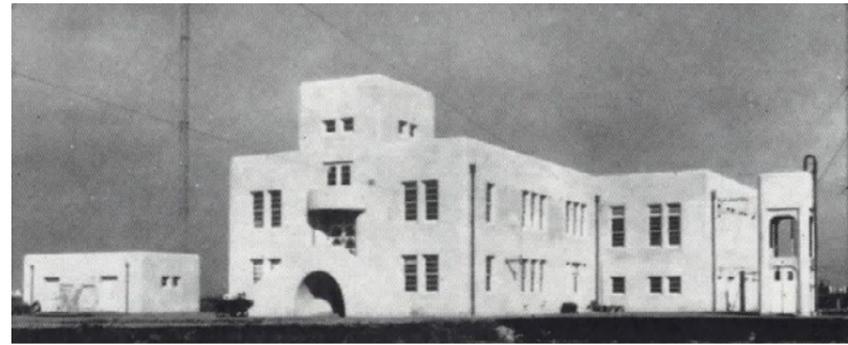
施工 近藤組(東京深川)
 着工 大正13(1924)年4月
 竣工 大正15(1926)年3月
 工事費 116,274円



現在の旧検見川送信所



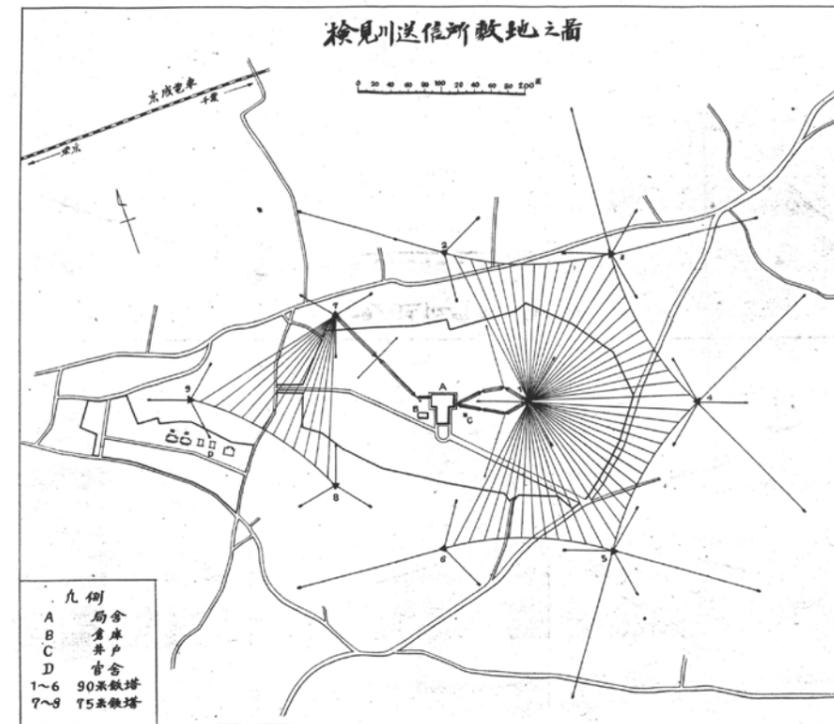
当初の局舎正面
 大正15(1926)年第一期工事竣工後
 『通信建築アーカイブズ』(NTTファシリティーズ)



当初の検見川送信所
 大正15(1926)年第一期工事竣工後
 『吉田鉄郎作品集』(吉田鉄郎建築作品集刊行会・昭和43(1968)年)



局舎全景
 昭和13(1938)年増築後
 『通信建築アーカイブズ』(NTTファシリティーズ)



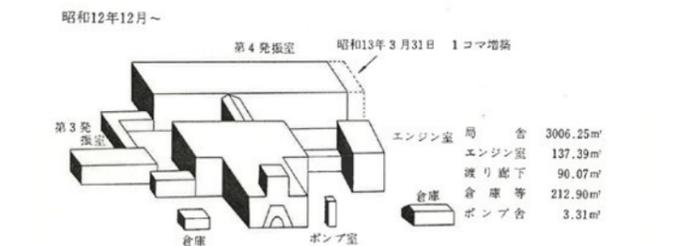
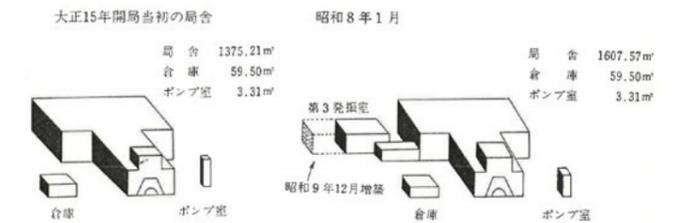
当初配置図
 『東京無線電信局設備大要』(逓信省・大正15(1926)年)



局舎全景
 『検見川無線30年史』(日本電信電話公社東京無線通信部・昭和28(1953)年)

■沿革と業績

大正15(1926)年	4.1 開局 東京無線電信局検見川送信所
昭和5(1930)年	対米・英・独・スイス・オーストラリア・タイ・フィリピン・台湾無線電話実験
昭和5(1930)年	10.27 日本初の国際放送 浜口雄幸首相のロンドン軍縮条約締結記念放送
昭和6(1931)年	1. 無線写真電送実験
昭和7(1932)年	7. ロサンゼルスオリンピック交換中継放送
昭和12(1937)年	超短波電話実験
昭和15(1940)年	1.30 日本標準時を発信開始 米国に継ぎ世界で2番目の短波JJY(標準電波局)となる
昭和27(1952)年	8.1 日本電信電話公社発足
昭和54(1979)年	9.1 廃止 業務を名崎送信所(茨城)に移管



旧局舎一第4発振室間の渡り廊下(木造)を、37年12月に鉄筋に改修
 空中線倉庫、車庫、自転車置場等25年以降増築された。
 局舎の変遷
 『検見川無線史』(検見川無線史編集委員会・昭和54(1979)年)



玄関上部2階ホール
 外観と同様に、表現主義的な角の丸い意匠が各所にみられる。



第七倉庫(当初は便所)
 特徴的な放物線アーチ窓がみられる。建物全体にわたって、天井にも丸み(コーヴ)が付けられている。



1階ホール(当初は機械室)
 後世の改修が激しい。当初は吹抜であったが、中古に天井(2階床)が張られている。



背面
 増築され、その後撤去された渡廊下(2階建て)の接続跡が残されている。

逓信省東京無線電信局の建築

受信所



岩槻受信所 大正 13 (1924) 年 山田守
現存せず



検見川送信所 大正 15 (1926) 年 吉田鉄郎

中央集中式の通信が行われ、岩槻受信所・検見川送信所・中央通信所の3箇所が連絡線で繋がれていた。
建物はいずれも表現主義的の作風。

中央通信所



東京無線電信局 大正 14 (1925) 年 山田守
現存せず

中央通信所で自動発信器を操作し、検見川送信所の中継器を介して空中線から電波を発信した。



連絡線
トーンチャンネル



連絡線
コントロールライン

同時代の表現主義的作例



下関電局電話課庁舎 大正 11 (1922) 年
山口県下関市 設計：逓信省
現・田中絹代ぶんか館
図版：http://www.zenkin.jp



写真提供：西日本電信電話株式会社
京都中央電話局西陣分局舎 大正 10 (1921) 年
京都府京都市 設計：岩元禄 (逓信省)
現・NTT 西日本京都支店西陣別館 (西陣 IT 路地)
図版：http://it-rouji.net



依佐美 (よさみ) 送信所 昭和 4 (1929) 年
愛知県刈谷市 設計：竹内芳太郎
現存せず (跡地に外観を模したフローラルプラザを建設)
図版：http://www.denkikogyo.co.jp



ラジオ・コートヴィーク Radio Kootwijk
1922 (大正 11) 年 現存
オランダ ヘルダーラント州 Apeldoorn
図版：http://en.wikipedia.org

吉田鉄郎の作品

大正後期 〈表現主義的作風〉



京都七条郵便局 大正 11 (1922) 年
京都府京都市
現存せず (現・京都タワー敷地)



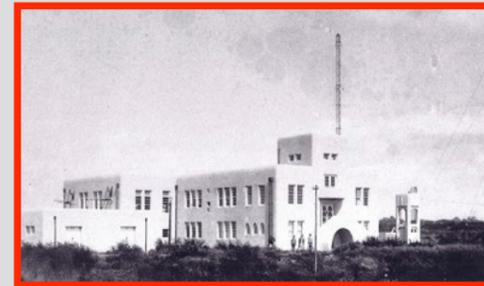
山田郵便局電話事務室 大正 12 (1923) 年
三重県伊勢市
現・ボンヴィヴァン (フランス料理レストラン)



京都中央電話局新上分局 大正 13 (1924) 年
京都府京都市
現・フレスコ (スーパーマーケット)



京都中央電話局 大正 15 (1926) 年
京都府京都市
現・新風館 (複合商業施設)



検見川送信所 第一期 大正 15 (1926) 年
千葉県千葉市



別府市公会堂 昭和 3 (1928) 年
大分県別府市
現・別府市中央公民館 別府市指定文化財

昭和初期 〈モダニズム的作風〉



大阪東郵便局 昭和 6 (1931) 年
大阪府大阪市 現存せず



東京中央郵便局 昭和 6 (1931) 年
東京都千代田区 現・JPタワー KITTE (キッテ) 一部保存



赤羽郵便局 昭和 10 (1935) 年
東京都北区 現存せず



検見川送信所 第二期 昭和 12 (1937) 年
千葉県千葉市 現存せず



中野-釜戸電話中継所 昭和 13 (1938) 年
岐阜県瑞浪市 現存せず



大阪中央郵便局 昭和 14 (1939) 年
大阪府大阪市 再開発計画進行中 現存せず

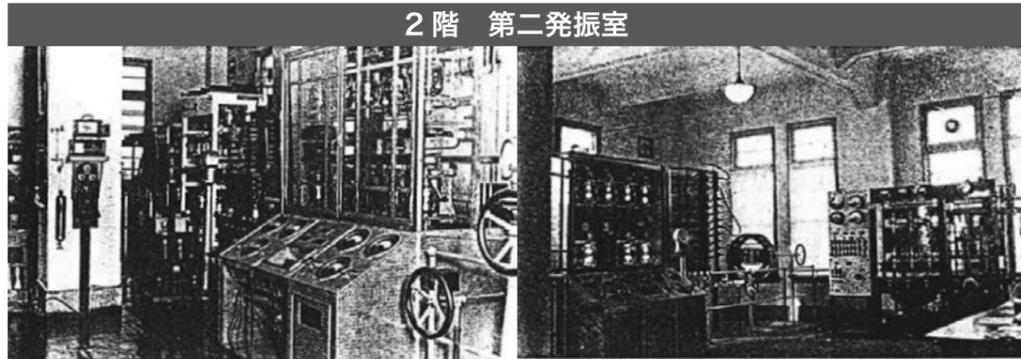
『吉田鉄郎作品集』(吉田鉄郎建築作品集刊行会・昭和 43 (1968) 年)



1階 機械室

『検見川無線史』(検見川無線史編集委員会・昭和54(1979)年)

発電機が置かれていた部屋。当初は2層吹抜であったが、現在は2階の床(木造)が張られている。また現在は、写真右上の屋内窓と間仕切りは失われており、写真奥の1階壁面も改変されている。写真左上には、吹抜に面した2階のハッチが見える。おそらく機材上げ下ろしの搬入口であろう。



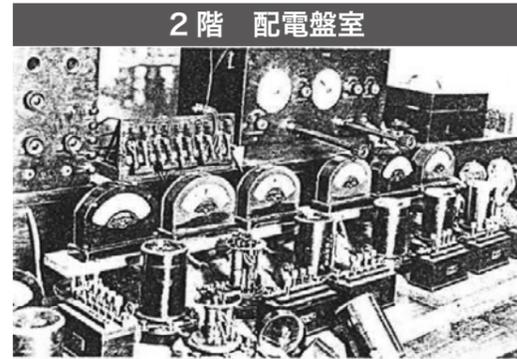
2階 第二発振室

第二発振室のマルコーニ会社(英国)製15キロワット(波長5,500m)送信機(左・励振部、右・増幅部)

『検見川無線の思い出』(菊谷秀雄・平成2(1990)年)

第二発振室 (左)マルコーニ会社(英国)製15キロワット送信機の増幅部とローディング・コイルとバリオ・メーター。(右)安中電機製3キロワット中波送信機(後で短波送信機に改装)

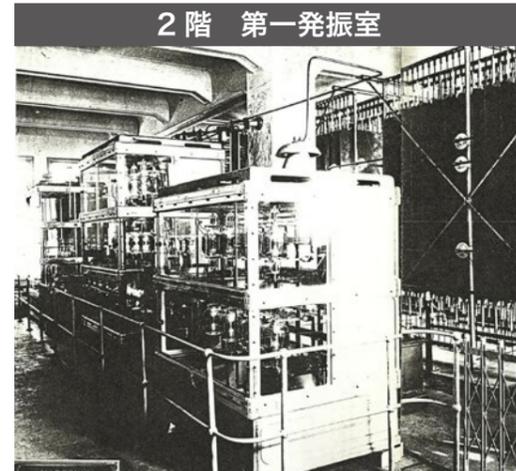
『検見川無線の思い出』(菊谷秀雄・平成2(1990)年)



2階 配電盤室

東京から遠隔操作によって働く電流計と継電器。(継電器は東京の中央通信所からの電鍵操作によって働く。この継電器によって更に強い電気を流し、各送信機の電鍵を動かしてそれぞれの電波を出す。後列中央はこの電波を監視するモニター受信機。)これらは配電盤室においた。

『検見川無線の思い出』(菊谷秀雄・平成2(1990)年)



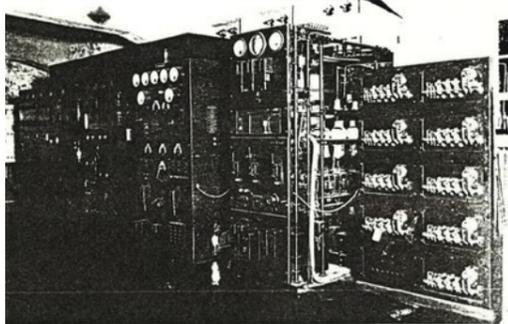
2階 第一発振室

『検見川無線史』(検見川無線史編集委員会・昭和54(1979)年)

検見川送信所舎平面図



1階 仮称第三発振室(倉庫)

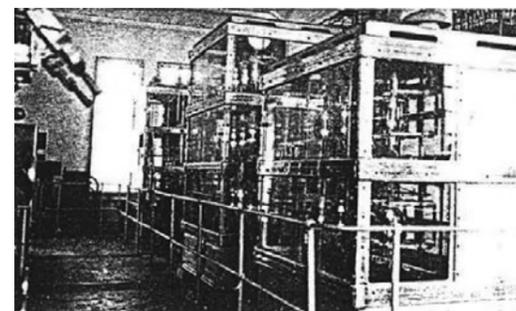


J1AAのコールで活躍したTU-1111号(+PA)送信機(10kW) 『検見川無線史』(検見川無線史編集委員会・昭和54(1979)年)



倉庫を利用した第三発振室(仮称)に置いたJ1AA短波無線電話送信機(東京無線電機株式会社試作品)。太い柱、大きな梁、小さな突き出し窓、低い天井、真空管の出す熱で室は蒸風呂のように暑かった。右側の田久保君が右手に握っているのは電話機用のカーボン送話器。

『検見川無線の思い出』(菊谷秀雄・平成2(1990)年)



第一発振室のマルコーニ会社(英国)製50キロワット(波長8,200m)長波送信機(向って左から励振部、整流管部、増幅部)

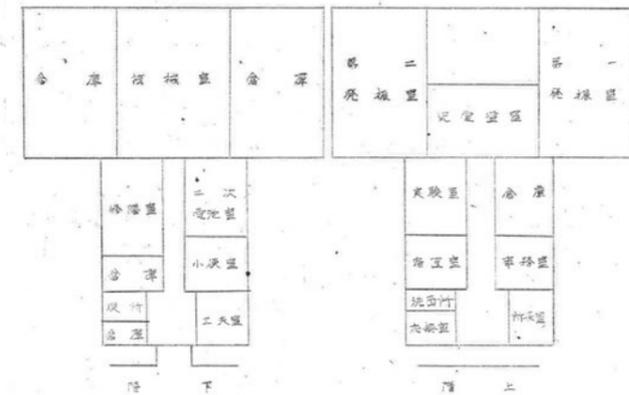


第一発振室のマルコーニ会社(英国)製50キロワット送信機のローディング・コイル(右)とバリオ・メーター(左下)。左上から吊り下げられた板は同調用コンデンサー。

『検見川無線の思い出』(菊谷秀雄・平成2(1990)年)

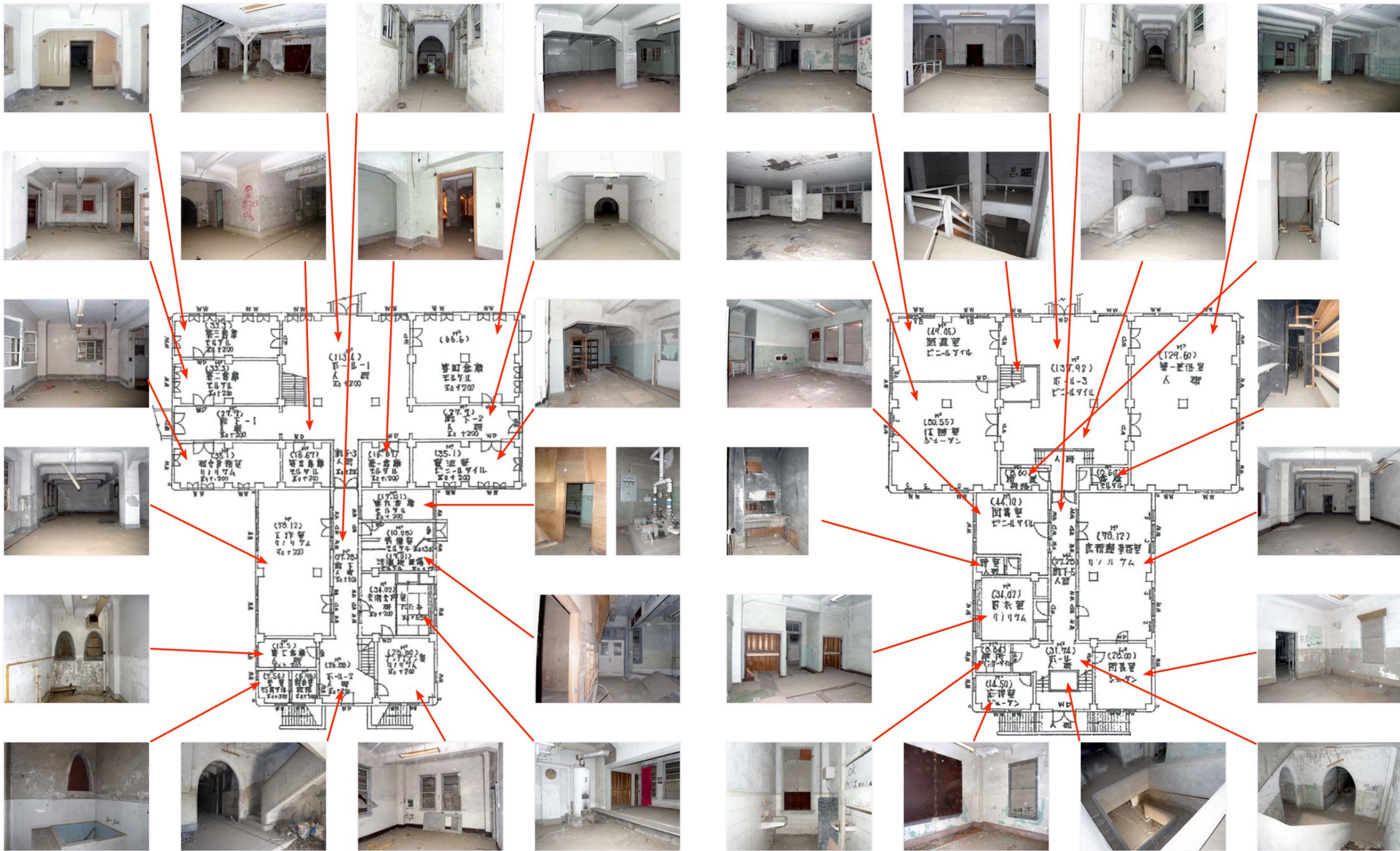
『東京無線電信局設備大要』所載の当初間取り図

『東京無線電信局設備大要』(通信省・大正15(1926)年)



『検見川無線30年史』所載の当初間取り図

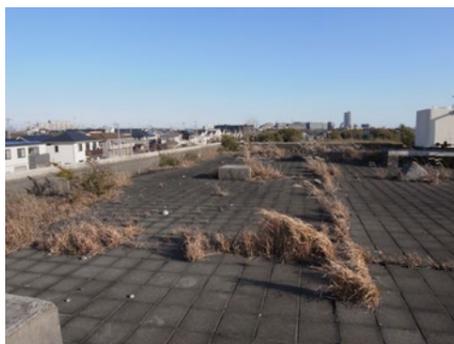
『検見川無線30年史』(日本電信電話公社東京無線通信部昭和28(1953)年)



1階

2階

屋 上



草木が繁茂している



平板の目地に根を張っている。



成高く育ったものもみられる。



太い幹の樹木もみられる。



屋上スラブに亀裂から雨漏りを生じている。

外 壁



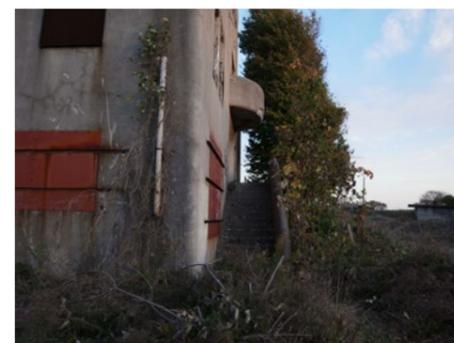
樹木の枝が擦って、外壁を破損させている。



左図詳細。



爆裂した鉄筋が露出している。



現在は問題の樹木が枝払いされている。



平成初年頃の外観 『名残り—葉街プレイバック—』(千葉市文化振興財団・平成5(1993)年)より

建 具



鉄板で塞がれた開口部。



鉄板で塞がれた開口部。



腐朽・破損した木製建具。



腐朽・破損した木製建具。



腐朽・破損した木製建具。

内 部



剥落したペンキ。



破損材、剥落材、ゴミ等の集積。



破損材、剥落材、ゴミ等の集積。



中古木造床の破損。



落書。